

エコハウス研究会季刊紙

そらどま

2023年

春号

第13号

2023 SPRING vol. 13

CONTENT

丸谷博男（代表理事）

数寄屋建築の新たなる再生復活を願う

表紙

国宝茶室・如庵（岐阜県犬山市）

如庵の茶室としての室礼は独特である。正面から見て土間の踏み込みがあり、入ると正面に掃き出しの出入り口、右に躊躇口がある。室内の一番の特徴は、手前座の中柱が茶室の中心となっていることである。さらに空間構成の中で特筆できるのは、床脇の斜行した壁面であり、三角形の地板「鱗板」である。この存在が絶妙な動きを空間に印象付けている。



数寄屋建築の 新たなる再生復活を願う



■プロローグ

建築・土木産業は人類の活動になくてはならないものとして有史以来発展し続けてきた。とくに最近では高速移送手段の発展とともに、そのインフラを担ってきた。商業の形態の変化とともに商業ビル、オフィスビルも都市開発の最先端として時代を牽引してきている。住宅産業も、その一躍として同じ環境下にある。

さて、その結果はどうであろうか。その姿からは、決して人間と地球が共生する環境とは程多いものになっているとしか思えない。その姿に未来への不安こそ感じることはあっても、共生の展望は見出せない。

東京都町田市野津田町に農村伝道神学校という学校が運営され、そこでは農業環境を保ちながら牧師教育が継続されてきた。その結果、里山の環境が守られ、今もその姿を維持している。そのキャンパスの中に残されていた数寄屋建築があった。縁があり、その朽ち果てていた建物を再生する主人公となった。約丸一年かけて、「再築」した。そのプロセスの中で、改めて様式や建築の真髄を学び取ることができた。それはきっかけに過ぎないが、未来に向けた「数寄屋」建築の新しい可能性を構築しなくてはいけないと思い立ち、ここにその最初の取り組みをまとめていく。

■数寄屋の時代とデザインをこれた価値とは何か

これから探求する視点を簡単に列挙しておく。そのような視点を展望して、歴史を捉え、未来への形を展望していく。

- ・身近な材料に目をむける
- ・持続可能な地球の資源として、生物由来の建材を使用する
- ・人間のオーダーではない、地球のオーダーとしての由来を持つ鉱物などの建材は再利用可能な形で使い続ける
- ・エネルギーに関しても、人間のオーダーで再生可能となるものを使用し、太陽の熱・光、宇宙の熱・光を活用する
- ・一度つくったものは、可能な限り使い続ける

■数寄屋の系譜

歴史以前の問題として、考えことがある。それは、「晴れ」の場と「穀」の場という意識が生まれた時から、存在する意識である。

貴族や官僚が生まれ、公的な場と私的な場との違いが生まれた時から始まる、人間の独特的感性とも言えるものである。

「昔、都に住まいながら、山居に憧れた豊原統秋は樂の名人として宮仕えの身であったため、自分の住居を田舎造りとし、山にても憂からむときの隠れ家やみやこの内の松の下庵」

と詠いました。室町時代の話ではあるが、「市中の山居」が話題となつたことからも当時の人の数寄屋を求める気持ちが伝わってきいき、日々の暮らしを大事にしたい人であれば、共感できるのではないでしょうか。」(松原設計室松原和史、以後略称KMとする)

奈良時代にもすでにそのような感性が生まれ表現されていたことも確かである。

「歐米人と異なり、日本人が虫の音を人の声のように聴き取る特殊な脳の働きを持っていることが脳科学の研究により広く知られるようになったが、我々が自然の草木に関心を寄せ、風の流れのなかに季節を感じ、木肌をなでて心落ち着くことは、奈良の昔も変わらぬこと、万葉集の歌にも明らかで、おそらく永遠に変わらぬ日本人の習性なのであろう。実際、当時の宮殿の建物が檜や色塗りの材でつくられていた宮廷周辺にあっても、私的な居住空間にあっては、好んで黒木“と呼ばれる皮付きの丸太を使われていたことが分かれている。」

さらに時代を経るにつれ、その意識は高まり、「古く京の公家の邸第に興った数寄屋—自然素材と素朴な架構美にくつろぎを見いだす美意識と手法が日本の伝統となり、室町期の書院や桃山期の茶室によって洗練され、公家では桂離宮・修学院、武家では聴秋閣・臨春閣（ともに現横浜三渓園内）、その他西本願寺飛雲閣などが残されました。その後も江戸のお茶屋文化、明治・大正期の近代化を経て、ますます豊かに発展を遂げて現代へと受け継がれています。」(KM) 公家と武家だけではなく、寺でも、商家でも、農家でも数寄屋の空間が取り入れられていく。

平安時代には、中国の影響が強くあり、寝殿造りが貴族の間で広がっていく。

「都が水の豊かな京へ移ると、上層貴族は邸宅の広い敷地に水を引いて池を掘り、築山を築き、とりどりの草木をふんだんに栽えて虫魚を放ち、池に張り出した泉殿や釣殿（涼み台・月見台）に出て、その声に聴き入るという愉しみ方をしている。そんな生活のある一方で、文雅に長けた官人たちのなかには、当時の先進文化国・中国の文人による詩文世界（特に白居易の香炉峰下の草廬生活など）に強く憧れるあまり、好みの自然木や竹（白氏が好んだ）などを使って、山居の香りのする小亭を構えるという風が、長く伝統のように伝わっていく。時代の主な人物だけ拾っても、在原業平（825-880）の亭、兼明親王（919-981）の小倉山亭、慶滋保胤（934-994）の亭、鴨長明（1155-1216）の方丈などがある。こうして、邸宅に贅を尽くす貴族が現れる反面、閑居を思わせる住居スタイルが下級公家・文化人の伝統になっていくことが、注意を引く。」（KM）

こうした時代から、武家社会へと大きな変化をしていく時に、武士達の間に根を下ろして行ったのが禅の心だった。

「京を離れた鎌倉の上層武士団は、時を合わせたように登場した大陸渡来の禅文化に公家とは異なる生き方を探すなかで深く関わったことから、禅の風儀が広く、その後の彼らの文化全般において、すべてにより簡潔な直接表現を求める心性が育った。機能を重視し、無駄を削ぎ落として、モノの本質に迫ろうとする新しい美意識は、この後、武事をはじめ諸文芸（連歌・能・香・花・茶など）を修行の道としていくことになる。」（KM）

鎌倉時代から室町時代へと進み、武家の文化も奥深く発展していく。中国からの影響も大きく、喫茶の文化、書院建築、禅宗建築の発展など形となって現れていく。

「歌道に生まれた新しい感性が能楽において、また、茶道の成立に寄与して、やがて建築造形に反映していくなど、底流として桃山・江戸まで流れていくのだが、室町中期（1500年頃）、ここに奈良出身の僧がスキヤの歴史に画期的な仕事を残すことになる。“茶の湯開山”となる村田珠光である。

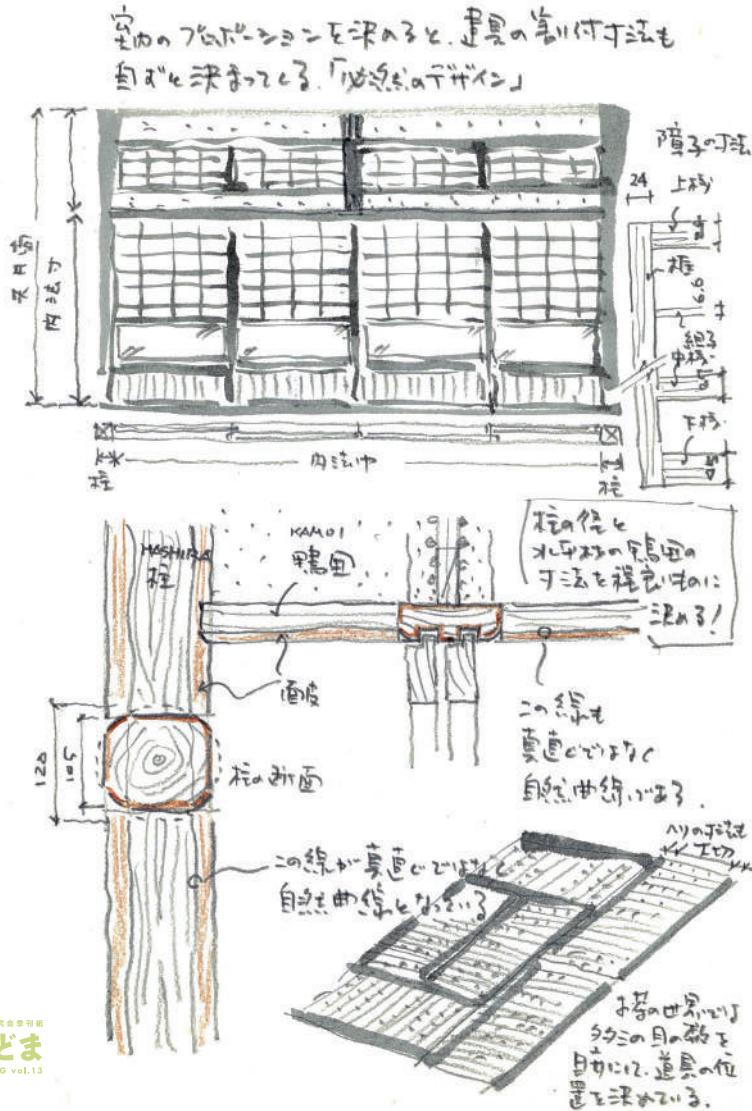
二十歳の頃京へ出た珠光は大徳寺・一休禪師の下で禅を修め、その許しを経た後、足利義政（八代将軍）の同朋衆（美的生活の監督兼管理者）である能阿弥のもとに留まり、將軍収蔵の唐物名物・名品に親しく触れて、一級品の何たるかを学ぶという幸運に恵まれ、やがて当代一の目利きとしての評判を得るまでになる。かねて茶を供することに一方ならぬ工夫のあった珠光は、さきに大徳寺では禅院茶礼（献茶を中心とした儀式の茶）を、この能阿弥の下では殿中茶礼（書院茶立所の台子の茶）を習得するおよび、ただの貧僧にすぎぬ自分の茶とは、“物の足らざるを心で補う”ものであるべきで、また大陸渡りの名物唐物にのみ依存している美意識だけが、わが国本来の美意識ではないことの自覚から、“和漢の境を紛らかす”として国物と低く言われた瀬戸などの国産品をとりいれ、また粗相なるものの美を発見して、これと唐物とを取り扱う対照の妙を“面白し”として茶の場に供し、“藁家に名馬を繋ぎたるがよし”ということを、宗珠・空海といった高弟たちに教えたと言う。」（KM）

室町時代から桃山時代になる1550年頃から、貴族・武家・商人が一体となって茶屋を所有し、茶屋で遊び、茶屋で接待する様子が頻繁になってくる。その後秀吉の時代になると、数寄屋としての茶屋が定着する。そして、何と言っても画期的な発明と言える快挙を遂げたのが千利休であった。

「この頃、側近・利休の茶も完成の域に入り、茶の湯に堅苦しさを憶えていた秀吉は盛んに茶屋を取り込んだ園遊を催す。天正15年（1591）北野大茶会に間に合わなかった宗湛を聚楽第の松原の茶屋に招いた遊びたっぷりの会などがあるが、なかでも一番は醍醐の花見を催した際の、とりどりの趣向を尽くした八軒の茶屋で名だたる武将が一日商人や百姓となって物を売って興じたという園遊であろう。こうした遊びの工夫のなかから、書院の意匠をとり、田舎家の素朴をまね、進化中の茶室からは品位を取り込んで、人を暫し閑雅なくつろぎに憩わせる数寄屋のスタイルが選択されていったと思われる。この時代、数寄屋の第一の創造者も、茶室を完成に向かわせていたのと同じ利休で、聚楽第にあった利休屋敷は、そのかつて見たことのない独特のたたずまいであるものを絶句させるほどであつたし、四国の武将・長宗我部は利休に茶座敷と茶屋の建設を依頼している。当時、茶室という言葉はなく、茶座敷・数寄座敷などと呼ばれていたが、紹鷗の4畳半からさらに2畳、1畳半と簡素化が進み、4尺床・下地窓・にじり口・突上げ窓など、現在の茶室を構成する侘び茶の表現はほぼ出揃っていた一方で、黄金の茶室を秀吉が宮中に持ち込んで天皇に披露した頃から、皇室周辺にも茶の湯を試みる機運が生まれ、ここに茶屋・茶室の建築と公家の遊びの伝統が合体して、新しい数寄屋が現れるもとが用意された。」（KM）

明治時代を迎え文化開花、洋風化の荒波の中にあっても数寄屋建築は継続した。

「明治維新後は、欧化の波のなかで伝統建築が日陰に回りがちだったが、混乱を生き抜いた政府貴紳たちや、政商と言われる有力商人たちの間では、自宅を流行りの洋館でつくりながらも、それと連絡するかたちで必ず傍らに書院の接客室と、数寄屋の私室を用意することを忘れない。明治20年代以降になると、貴紳の住宅建築は、書院で全体の威厳を表明しながら、細部を数寄屋意匠で遊んで緊張を和らげる、ということをする一方で、別荘というかたちで構えた住まいには、徹底した数寄屋で粋を通した建築を愉しむということをする。手がける工匠も一流だが、任せる貴紳も趣味・識見に優れ、相互の刺激でよいものがつくり出されていったのであろう。南禅寺畔の邸宅群（対龍山荘・清流亭）、目白の屋敷群（蕉雨園・椿山荘）などは現存する好例であろう。」（KM）



大正・昭和における急速な経済成長と経済・情報国際化の波の中でも、数寄屋は表現され続けた。

「大正以降の数寄屋が持つ大きな変化は、工匠が手がけていた数寄屋という分野に欧米の建築学術と思潮を学んだ建築家が入って、設計のみならず監理までするようになったことであろう。従来の数寄屋から見ると、意匠のみが先行して追随すべき技術が工匠任せという傾向はあるものの、彼らの残した斬新な感覚は他に変えがたい価値を数寄屋世界に刻んだことを示して余りあると言わねばならない。江戸文化の蓄積から紡ぎ出す吉田五十八の粋表現、八勝軒を頂点とした堀口捨巳の整然とした作品群と茶室研究、古典を踏まえて生まれる村野藤吾の洒脱など。小生も、先人の跡につづいて、こののち、一步でも新世界に踏み出したいものと思う。」(KM)

ここで、注目したいのは、上記3人の建築家の仕事。私自身の中でも、さまざまな意味で、それぞれからの影響が色濃く感じている。今でも、その仕事を見ることができる建築が多く残っている。ただし、今回取り組んでいる「次世代への心とデザイン・数寄屋」という概念にはデザイン的な興味はあっても異次元の価値と判断している。

平成、令和の時代における数寄屋建築に秘められた「次世代への心とデザイン・数寄屋」ではあるが、現代の住居、施設の作り方、考え方には法外なものとなっている。東京の浜松町にある40階建の東芝ビルは1984年の竣工で2020年に解体が始まっています。あまりにも身勝手な人間の仕業である。さて、それだけではなく、「数寄屋の家づくり」は社会運動になっても良いと思っている。現場の「限りなき破壊と建設」という事象に対するアンチテーゼであり、眞の意味からの「持続可能な社会における建築のあり方」を提案するものとなるのではないだろうか。今後のさらなる理論化にご期待されたい。

本 部 東京都世田谷区代田3-48-5梅ヶ丘アートセンター

事務局 東京都国立市富士見台2-12-32

代 理 事 丸谷博男(株式会社エーアンドエー・セントラル代表取締役)

理 事 若原一貴(日本大学芸術学部教授)

理事(事務局長) 磯貝左千夫(株式会社ジェイボックス代表取締役)

東北エリア 高木正基(高木電気管理事務所)

関東・沖縄エリア 菅原律子(菅原律子設計事務所+itS)

関東エリア 萩原太介(株式会社ホームズ空間創建)

静岡エリア 永田章人(株式会社永田デザイン)

浜松エリア 大石智(有限会社大石設計室)

北陸エリア 永森裕章(株式会社ジーブラス)

関西エリア 上原弘一郎(ウイズダムデザイン)

関西エリア 新堂雄美(ASAP.デザインラボ)

九州エリア 金子知史(金子工務店)